

関係者各位

Press Release No. 1

令和4年5月26日

2022年（第32回）福岡アジア文化賞

FUKUOKA PRIZE 2022



受賞者発表

アジアの学術研究や芸術・文化の分野で顕著な業績をあげた方を顕彰する福岡アジア文化賞。

第32回目となる今年の受賞者は、この3名の方々に決定しました。

日本人の大賞受賞は、2013年（第24回）の中村哲氏以来、9年ぶりです。



大賞 林 英哲氏（70歳） HAYASHI Eitetsu

日本／太鼓奏者

新しい創作太鼓音楽の最先端を走り続けてきた世界的に活躍する太鼓奏者

- ・地域の祭礼や行事と結びついた伝統的な太鼓文化を基盤としつつ、身体所作の力強さと美しさを伴う全く新しい舞台芸術として太鼓の表現を飛躍的に発展させた
- ・世界有数の交響楽団や様々なジャンルのアーティストと共演。世界規模で活動の続け、新たな表現を通して日本文化の国際発信に挑んでいる
- ・演奏だけでなく、作曲、舞台の演出にも卓越した手腕を発揮している
- ・これまでになかった独創的な太鼓音楽の様式を築き上げ、今なお進化し続けている



学術研究賞 タイモン・スクリーチ氏（60歳） Timon SCREECH

英国／美術史家

美術「を」研究するのみならず、美術「で」研究する美術史家

- ・江戸を主たるフィールドに、広くビジュアル情報として残された歴史を解明し続ける博覧強記の日本研究者
- ・斬新な江戸研究を提示した話題作を立て続けに出版、英語圏にとどまらず、韓国語や中国語に翻訳されているものもあり、内外の学界に大きな衝撃を与えてきた
- ・膨大なビジュアル及び文献情報を、多元的かつグローバルな視点と斬新な方法論によって江戸研究の新たな地平を切り開いている



芸術・文化賞 シャジア・シカンダー氏（53歳） Shahzia SIKANDER

米国／アーティスト

伝統絵画とデジタル技術が融合した新たな芸術表現を切り開くアーティスト

- ・南アジアを代表するパキスタン出身の女性アーティストで、国際的に高い評価を得ている
- ・伝統に連なる細密画の世界に、最新のデジタル技術を駆使し、伝統絵画を今を生きる魅力的な造形として蘇らせ、「ネオ・ミニチュール（新細密画）」の世界を作り上げた
- ・世界が抱える困難な課題（民族、宗教、ジェンダー、移民など）を南アジアの伝統を踏まえ刷新し、今日的な造形によって暗喩的に描き出している
- ・南アジアの女性アーティストのロールモデルとなり、後に続く世代に道を開き続けている

授賞式は9月27日(火)に開催し、オンライン配信を行う予定です（次頁参照）

2022 年（第 32 回）福岡アジア文化賞 公式行事日程（予定）

令和 4 年 5 月 26 日時点

行 事	日 程	場 所	内 容
授賞式	9 月 27 日(火) ※18:45～19:45 (予定)	福岡国際会議場 (メインホール)	授賞式典 ※会場参加は関係者のみ ※ライブ配信及びアーカイブ 配信あり (事前申込制)
市民フォーラム	<大賞> 林 英哲氏 9 月 28 日(水) 夜	電気ビル共創館 (みらいホール)	受賞者による市民を対象と した講演会や演奏等 ※会場参加及びアーカイブ 配信あり (事前申込制)
	<学術研究賞> タイモン・スクリーチ氏 9 月 28 日(水) 午後	福岡市美術館 (ミュージアムホール)	
	<芸術・文化賞> シャジア・シカンダー氏 9 月 30 日(金) 午後	福岡アジア美術館 (あじびホール)	
学校訪問	9 月 26 日(月) ～ 9 月 30 日(金) ※日程調整中	福岡市内の 中学校・高校	受賞者が学校を訪問し、 生徒と交流

※各行事の申し込みは、8 月 1 日から開始予定です

【問い合わせ先】 総務企画局国際部アジア連携課（福岡アジア文化賞委員会事務局）
担当：中野、円城寺 Tel：092-711-4930 Fax：092-735-4130
福岡アジア文化賞 URL <https://fukuoka-prize.org/>

ASIAN PARTY とは…9 月から 10 月にかけて集中的に開催されるアジアとクリエイティブ関連事業の総称です。

「アジアと創る」をコンセプトに、アジアのヒト、モノ、情報が集う社交場をイメージし、「アジアを知る」アジアマンスからリニューアルして 10 回目を迎えます。「福岡アジア文化賞」、「The Creators」のほか、民間企業・団体等と連携し様々なイベントを開催します。

大賞 林 英哲

(日本／太鼓奏者)

【贈賞理由】

日本の太鼓音楽は wadaiko あるいは taiko として、今や世界どこでも通用する単語となった。林英哲氏は、その新しい創作太鼓音楽の最先端をつねに走り続けてきた音楽家である。日本には伝統的に、佐渡、秩父、八丈島、その他各地に、地域の祭礼・行事と結びついた民俗芸能の太鼓文化がある。氏の功績はそうした伝統的な太鼓を基盤としつつ、身体所作の力強さと美しさを伴う全く新しい舞台芸術として太鼓の表現を飛躍的に発展させたことにある。

「誰が打っても同じ」あるいは「とにかく単調」と思われがちな太鼓の音は、実は、バチの種類、打つ箇所、力加減によって極めて多彩な音が出ること、種類の異なる多数の太鼓や鉦、笛を組み合わせれば、さらに表現が広がることを林氏は見事に実証した。また、世界各地のオーケストラ、ジャズの山下洋輔、ギニアのママディ・ケイタ、韓国のサムルノリの金徳洙（福岡アジア文化賞受賞者）など異なるジャンルの音楽家たちとのコラボレーションでも新たな表現を通して日本文化の国際発信に挑んでいる。氏は、それまでなかった独創的な太鼓音楽の様式を築き上げ、さらに現在なお進化し続ける孤高のランナーのような表現者である。

林氏は 1970 年代初頭からの 11 年間のグループ活動の後、太鼓ソリストとして本格的に活動を始めた。国内各地で精力的にコンサートに出演し、啓蒙的、慈善的な催しへも積極的に協力してきた。活動 50 周年を迎えた 2021 年 3 月には、サントリーホールで全曲ソロの 50 周年記念公演第一弾を行い、翌 2022 年 2 月には舞踏家の鷹赤兒はじめ個性的な共演者を迎えた公演第二弾を開催して大きな話題となった。

一方、海外での活躍も目覚ましい。1984 年には水野修孝作曲「交響的変容第 3 部」の太鼓ソリストとしてニューヨークのカーネギー・ホールでデビューを飾り、以後、北米、南米、ヨーロッパ、中東、アフリカ、アジア各地で演奏活動を繰り返し広げている。松下功作曲「飛天遊」は、海外のオーケストラとすでに 100 回以上演奏しているといい、林氏は今や海外で最もよく知られた日本人音楽家の一人となっている。これらの活動が評価されて、1997 年に芸術選奨文部大臣賞、2001 年に日本伝統文化振興賞、2017 年に松尾芸能賞大賞、2021 年には JTS 山本邦山記念賞を受賞した。

林氏を単に太鼓奏者と呼ぶことは適切ではない。なぜなら、演奏だけでなく、作曲、舞台の演出にも卓越した手腕を発揮しているからだ。氏は若い頃から美術に造詣が深く、太鼓の打ち手の身体の見せ方、舞台の視覚的デザインや装束には独特のセンスがある。また、2004 年に氏自身が創作した「レオナール われに羽賜べ」などは、音楽の枠を超えてドラマ性も併せ持つ、斬新な「音楽劇」の様相を呈している。こうした諸要素を統合した太鼓芸術が、林英哲という表現者が創り出してきた世界なのである。1995 年からは「英哲風雲の会」を率い、後進の指導にも力を注いでいる。

このように、林氏は、日本の太鼓音楽の第一人者として、その独創的な表現の追求と完璧なパフォーマンスの実現にたゆまぬ努力と情熱を注いできた。その活動は世界規模である。林英哲氏の貢献はまさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。

第32回福岡アジア文化賞 大賞

林 英哲

日本

太鼓奏者（太鼓独奏者、作曲・演出家、英哲風雲の会主宰・芸術監督）

1952年2月2日生（70歳）

経歴

1952	広島県生まれ
1970	広島県立東城高等学校 卒業
1971-81	「佐渡・鬼太鼓座」創設参加・所属 太鼓演目の創作・再構成を担う同座の中心プレイヤー
1981-82	「鼓童」創設メンバー・所属 自ら「鼓童」と命名、創成期の演出も担当
1981	日本舞踊花柳流名取（花柳奈日人）
1982-	プロフェッショナル太鼓独奏者として独立
1984	太鼓独奏者として米国カーネギー・ホールでデビュー
1985	初のソロコンサート「千年の寡黙」開催 1時間以上にわたり一人で太鼓を打ち続ける
2000	ベルリンフィル主催「ヴァルトビューネ・サマーコンサート」に「飛天遊」のソリストとして参加
2000-04	三重大学人文学部客員教授
2003-16	株式会社三重大学出版会社外取締役
2004-15	洗足学園音楽大学客員教授（音楽学部現代邦楽科）
2004-13	東京藝術大学演奏芸術センター「劇場芸術論」特別講師（年1回）
2012-	小田原ふるさと大使（神奈川県小田原市）
2009-19	筑波大学大学院人間総合科学研究科「身体表現論」特別講師（年1回）
2014	文化庁「2014年度文化交流使」任命
2014-15	東京藝術大学演奏芸術センター「劇場芸術論」非常勤講師
2015-19	東京藝術大学演奏芸術センター 客員教授
2019-	益子大使（栃木県益子町）
2020-	東京藝術大学演奏芸術センター「劇場技術論」「舞台芸術実践論」特別講師（年1回）

主な受賞歴

1997	芸術選奨文部大臣賞（平成8年度第47回大衆芸能部門大賞／文化庁）※現・芸術選奨文部科学大臣賞
2001	日本伝統文化振興賞（2000年度第8回／日本文化芸術財団）
2005	ソロプチミスト千嘉代子賞（ソロプチミスト日本財団）
2013	庄原市市民栄誉賞（広島県庄原市）
2017	松尾芸能賞大賞（第38回／松尾芸能振興財団）
2021	第5回JTS山本邦山記念賞（（公財）Japan Treasure Summit）

主な音楽作品（CD）

- ・『風の使者』1982.
- ・『風の宴』1987.
- ・『英哲』1990.
- ・『かへりなむ、いざ』1993.
- ・『火の道』1996.
- ・『遙 [HARU]』1997.

- ・『若冲の翼〜冲しきが若きも』2000.
- ・『ベルリンコンサート The Quiet Ages 2000』2000. (+DVD)
- ・『マンハッタン・ライブ Jakuchu 2002』2002. (+DVD)
- ・『Ken-Kon 林英哲 meets 山下洋輔』2002. (+DVD)
- ・『光年の歌』2007.
- ・『GREAT ENCOUNTER〜林英哲 with オーケストラ』2008.

参加作品

- ・『武満徹／波の盆 嵐が丘』1988.
- ・『ハムザエルディーン スビア組曲』1990.
- ・『BUDDHIST MUSIC 千僧音曼荼羅』1993.
- ・『飛天遊／松下功作品集』1995.
- ・『風神・雷神／新実徳英協奏曲修』2004.
- ・『鬼神 和田薫の世界』2009.
- ・『アドルフに告ぐⅡ／上野耕平』（『ブエノウエノ／藤倉大』）2019.
- ・『残酷な天使のテーゼ MATSURI SPIRIT／高橋洋子』2019.
- ・『麒麟がくる オリジナルサウンドトラック』（『メインテーマ／ジョン・グラム』）2020.
- ・『11月の夜想曲／新倉瞳』（『巫〜チェロと和太鼓のための／和田薫』）2021.

主な公演

全国ツアー（国内）

- ・「万零」1998.
- ・「若冲の翼」1999-2000.
- ・「光を蒔く人」2000-01.
- ・「霧の蓮」2001-02.
- ・「レオナールわれに羽賜べ」2004-06, 2018.
- ・「迷宮の鼓美術少年」2013-14.

その他公演（国内）

- ・ソロ活動 25 周年記念コンサート「GREAT ENCOUNTER ～ 林 英哲 with オーケストラ」（全曲太鼓協奏曲）東京、兵庫、2007.
- ・「千響シリーズ三部作」（国立劇場「日本の太鼓」企画プロデュース）東京、2006-08.
- ・「五輪具」（演奏活動 40 周年記念 4 日間連続公演）東京、2012.
- ・演奏活動 50 周年記念「独奏の宴―絶世の未来へ」東京、2021.
- ・ソロ活動 40 周年記念「祝歳の響宴―絶世の未来へ」東京、2022.

その他公演（海外）

- ・「千年の寡黙 2000」ドイツ（ベルリン）、2000.
- ・「北米ツアー/Jakuchu 2002」米国（ニューヨーク/ロサンゼルス/サンフランシスコ）、2002
- ・「林 英哲 Taiko／アーティスト・イン・レジデンス・プロジェクト」米国（オハイオ）、2004-06.
- ・「豪州ツアー」オーストラリア（タウンズビル/シドニー/キャンベラ/メルボルン/パース）、2006.
- ・「中東 4 カ国ツアー」バーレーン、オマーン、ドバイ、UAE、2012.
- ・「カリブ海・北米ツアー『EITETSU HAYASHI with FU-UN no KAI in Concert “NATURE” S RHYTHM”』」米国、トリニダード・トバゴ共和国、キューバ、2014.
- ・「早稲田大学交響楽団欧州ツアー2015」ドイツ、オーストリア、フランス、2015. ※『モノプリズム』ヘソリスト参加
- ・「ラ・フォル・ジュルネ」フランス、2016-19. ※欧州最大級の音楽祭に 4 年連続で招聘される

※その他、シドニーシンフォニー、モントリオール交響楽団、香港フィルハーモニー、ウィーン・トーンキュンストラー管弦楽団、中部ドイツ放送交響楽団（MDR）などの招聘によりソリストとして参加

主な著作

- ・『あしたの太鼓打ちへ』晶文社、1992.／羽鳥書店（増補新装版）、2017.
- ・『世界がステージ！国を超えて仕事すること』岩波ジュニア新書、2002.
- ・『太鼓日月―独走の軌跡』講談社、2012.

学術研究賞 タイモン・スクリーチ

(英国／美術史家)

【贈賞理由】

タイモン・スクリーチ氏は、江戸を主たるフィールドとする美術史家であり、広くビジュアル情報（視覚史資料）として残された歴史を解明し続ける博覧強記の日本研究者である。美術「を」研究するのみならず、美術「で」研究する学者ともいえる。

スクリーチ氏は、1961年に英国バーミンガムに生まれた。1985年にオックスフォード大学（東洋学）卒業後、ハーバード大学で修士号及び博士号（いずれも美術史）を取得、1991年から2021年までロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）において、さらに2021年からは国際日本文化研究センター教授として研究活動を展開している。また2018年には the British Academy のフェローに迎えられている。

スクリーチ氏は、研究の初期段階において、戯作文学、浮世絵など大衆的なビジュアル・カルチャー（視覚文化）、蘭学の相互の影響関係を明らかにするという問題意識を獲得し、多くのビジュアル資料から得られる証拠を支えとしながら意識の歴史を追ってきた。その成果は、大著の博士論文 *The Western Scientific Gaze and Popular Imagery in Later Edo Japan* (1996)（邦訳『大江戸視覚革命』（1998年））として結実するが、その後も、人体解剖に焦点を当て、オランダでは切開が真理に至る唯一の方法であったのに対し、日本では多々ある真理へのアクセス手段の一に過ぎなかったと論じる『江戸の身体を開く』（1997年）、春画を芸術として美化するのではなく、春画は江戸のポルノグラフィであるとして喝破する『春画一片手で読む江戸の絵』（1998年）といった話題作を立て続けに出版し、内外の学界に大きな衝撃を与えてきた。

美術は、それを生み出すメカニズムやそれを取り巻く文化的、社会的、経済的状況との相互作用と切り離しては論じ得ない。美術のこの側面に対するスクリーチ氏の意識は一貫して明確であるが、『定信お見通し—寛政視覚改革の治世学』（2003年）ではさらに一步を進め、松平定信、狩野派、丸山応挙、司馬江漢、谷文晁等を通して、政治と美術を扱い、視覚政治学ともいうべきジャンルを切り開いている。また氏の作品では、江戸時代における欧州との交流という視座が重要な位置を占めており（たとえば『阿蘭陀が通る—人間交流の江戸美術史』（2011年））、自ずと世界史の文脈における日本史（グローバル・ヒストリー）としての性格を帯びるスケールの大きさを併せ持つ。他方で『江戸の大普請—徳川都市計画の詩学』（2007年）ではかかる視座は敢えて脇におき、京都に対抗した新たな都市空間づくりという観点から江戸を分析する斬新な江戸研究を提示し、学界を刺激している。氏の作品は英語圏にとどまらず韓国語および中国語にも翻訳されて一層評価を高めている。

膨大なビジュアル及び文献情報を、多元的かつグローバルな視点から、斬新な方法論によって分析することで江戸研究の新たな地平を切り開いてきたタイモン・スクリーチ氏は、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。

第32回福岡アジア文化賞 学術研究賞

タイモン・スクリーチ

英国
美術史家
国際日本文化研究センター教授
1961年9月28日生(60歳)

経歴

1961 英国、バーミンガム生まれ
1985 オックスフォード大学修士号(東洋・日本学)
1986 ハーバード大学修士号(美術史)
1991 ハーバード大学博士号(美術史)
1991-08 ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(SOAS) 准教授
2008-21 ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(SOAS) 教授
2014 イェール大学客員研究員
2014- 欧州学士院フェロー
2015 日本国際交流基金研究フェロー
2016 カルフォルニア大学バークレー校客員研究員
2017 東京外語大学アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム(CAAS) 客員研究教授
東京大学客員教授
2018- イギリス学士院フェロー
2019 カルフォルニア大学ロサンゼルス校客員研究員
2020-21 東京外語大学特別招へい教授
2021- 国際日本文化研究センター教授
その他、シカゴ大学客員教授、明治大学特別招へい教授、多摩美術大学客員教授等を歴任

主な受賞歴

2014 日本大使より特別表彰(日英の交流400周年を記念して発足した団体「ジャパン400」開催における共同議長の功績を表して)
2014 Freeman of the City of London (ロンドン名誉市民賞)
2015 Liveryman of the Guild of Mercers' Scholarsに選出

主な著作

- 『大江戸異人往来』丸善ブックス, 1995. (ちくま学芸文庫版, 2008)
- 『大江戸視覚革命: 十八世紀日本の西洋科学と民衆文化』作品社, 1998. (英語版あり)
- 『江戸の身体を開く』作品社, 1997. (韓国語版あり)
- 『春画: 片手で読む江戸の絵』講談社, 1998. (講談社学術文庫版, 2010.) (英語、ポーランド語、台湾語版あり)
- 『江戸の思考空間』青土社, 1999.
- 『定信お見通し 寛政視覚改革の治世学』青土社, 2003. (英語版あり)
- Artistic License: A Translation with Commentary of Ishino Hiromichi's 'Esoragoto' (1802), in series title, An Episodic Festschrift for Howard Hibbett* (訳, 編), Los Angeles: Highmoonoon Press, 2003.

- *Japan extolled and decried : Carl Peter Thunberg and the shogun's realm, 1775-1796* (編), London: Routledge, 2005.
- *Secret Memoirs of the Shoguns: Isaac Titsingh and Japan. 1785-1821* (編), London: Routledge, 2006. (ペーパーバック 第二版, 2009.)
- 『江戸の英吉利熱』 講談社 2006.
- 『江戸の大普請: 徳川都市計画の詩学』 講談社, 2007. (講談社学術文庫版, 2017.)
- 『阿蘭陀が通る: 人間交流の江戸美術史』 東京大学出版, 2011.
- *Obtaining Images: Art, Production and Display in Edo Japan*, London: Reaktion Books/ Honolulu: University of Hawaii Press, 2012. (ペーパーバック 第二版, 2017.)
- 「春画にみる異国とのつながり」『大英博物館春画：日本美術における性とたのしみ』(分担執筆) 小学館, 2015. (英語版あり)
- *Tokyo Before Tokyo: Power and Magic in the Shogun's City of Edo, 1590-1868*, London: Reaktion Books/ Chicago: Chicago University Press, 2020.
- *The Shogun's Silver Telescope: God, Art, and Money in the English Quest for Japan, 1600-1625*, Oxford: Oxford University Press, 2020.
- 「日本にやってきた空気ポンプの図像とその比喩的意味の展開」『文化・情報の結節点としての図像 絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏』(分担執筆) 晃洋書房, 2021.
- *Maritime Disasters and Auspicious Images: A New Look at Hokusai's "Great Wave"*, Japan Review No. 36: 5-32, 2022.

芸術・文化賞 シャジア・シカンダー

(米国／アーティスト)

【贈賞理由】

シャジア・シカンダー氏は、国際的に活躍し高い評価を得ている南アジアを代表する、パキスタン出身の美術家である。ムガル朝の伝統に連なる細密画の世界に、最新のデジタル技術を駆使して、伝統絵画を今を生きる魅力的な造形として蘇らせ、新たな芸術表現を切り開いてきた姿は南アジアの女性アーティストのロールモデルとなり、後に続く世代に道を開き続けている。

シカンダー氏は、1969 年、ムガル朝の古都ラホールに生まれた。同地の国立芸術大学で宮廷の伝統を受け継ぐミニアチュール（細密画）を学んだ後、米国に留学、ロードアイランド・スクール・オブ・デザインの修士課程に学び、より現代的な表現法を身につけ、今日的な主題に関心を向けていく。以後、パキスタンやベルリン、ラオスなど世界各地に住みながらその土地の問題に目を向け、近年はニューヨークを拠点に活発な制作活動が続けている。

1997 年のホイットニー・ビエンナーレに招待されるなど、90 年代にニューヨークの主要な美術館で展示の機会を得て、さらにハーシュホーン美術館（1999 年）をはじめ全米各地で個展を開催し、細密画の形式や技法を基盤にしながらも今日的な問題意識を反映した、暗喩に満ちた物語性豊かな作品によって活躍の場を広げていく。2000 年代に入ると細密画の世界にデジタル技術を導入したアニメーションなど映像作品に新境地を開き、アイルランド現代美術館（2007 年）やビルバオ・グッゲンハイム美術館（2015 年）など世界各地で個展を開催、ヴェネチア・ビエンナーレ（2011 年、2015 年）、イスタンブール・ビエンナーレ（2013 年）など欧米、アジア、中東の重要な現代美術展にも招かれ、その旺盛な制作活動と多様な文化が混在する独創的な表現世界が認められ、2003 年にニューヨーク市長表彰、2005 年にパキスタン政府栄誉賞を受けるなど、国際的な評価を高めた。また、日本でも福岡アジア美術トリエンナーレ 2009、東京都現代美術館の「トランスフォーメーション」展（2010 年）などに出品し、その名を知られた。

シカンダー氏は、軍事政権下のパキスタンでムスリム女性としての困難を乗り越え、衰退した伝統工芸、土産物とみられていた細密画に取り組んで、そこに現代社会が直面する問題、すなわち政治、民族、宗教、ジェンダー、移民などをめぐる様々な分断の姿と和解への希求を描き出し、ビデオやデジタル・アニメーションなどの現代的な手法も融合した豊かな「ネオ・ミニアチュール（新細密画）」の世界を作り上げた。そのあとには、多くの女性を含む南アジアの細密画家たちが続き、新たな表現世界を形成している。

世界が抱える困難な課題を、南アジアの伝統を踏まえ刷新しつつ、今日的な造形によって暗喩的に描き出し、国際的に高い評価を得るシカンダー氏の表現世界は、アジアの若手作家たちを鼓舞している。このように南アジアの代表的な女性アーティストとして意欲的な活動が続けるシャジア・シカンダー氏は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

第 32 回福岡アジア文化賞 芸術・文化賞

シャジア・シカンダー

米国

アーティスト

1969 年 3 月 6 日生 (53 歳)

経歴

- 1969 パキスタン、ラホール生まれ
 - 1991 ラホール国立芸術大学学士号 (美術)
 - 1992-93 ラホール国立芸術大学初の細密画の女性講師として教鞭をとる
 - 1993 渡米
 - 1995 米国、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン修士号 (美術)
 - 1995-97 ヒューストン美術館グラッセル美術学部コアフェローシップ
 - 2004 NPO 団体 Art21 役員
 - 2005 ロサンゼルス、オーティス・カレッジ アート&デザインにてジェニファー・ハワード・コールマン
特任教授講義とレジデンシー
 - 2007-08 ドイツ学術交流会レジデンシープログラムへ参加
 - 2009 ロックフェラー財団ベラジオセンター 初回クリエイティブアートフェローシップ
ホノルル、創設年度アーティスト・レジデンシー
 - 2010 ニューヨーク、ナショナル・アカデミー・ミュージアムの学士院会員に選出
 - 2016 ロードアイランド・スクール・オブ・デザインにてVikram and Geetanjali Kirloskar絵画客員研究員
 - 2019- ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン理事
- 現在、米国で活動中。ニューヨーク市に在住。

主な受賞歴

- 1992 パキスタン・ラホール国立芸術大学よりシャリーフ・アリ賞/キプリング賞 (最優秀特待生賞)
シャリーフ賞 (細密画部門優秀賞)
- 1993-95 ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン博士課程奨学フェローシップ賞
- 1997 ルイス・コンフォート・ティファニー基金賞
- 1999 ジョアン・ミッチェル賞
南アジア女性のクリエイティブ・コレクティブ功労賞 (2003年に再受賞)
- 2003 ニューヨーク市長表彰
- 2005 パキスタン政府栄誉賞
- 2006 ジョン・D.&キャサリン・T. マッカーサーフェローシップ、ジーニアス賞
世界経済フォーラムにてヤング・グローバル・リーダー賞
- 2008 南アジアエクセレンス賞よりパフォーミング&ヴィジュアルアーツ・アチーバー賞
- 2010 香港国際アートフェアにて SCMP Art Futures 賞
- 2012 米国国務省より創立年国民芸術勲章
- 2013 アーガー・ハーン建築賞マスター審査員
- 2014 グランド・ラピッズ美術館よりタイムベース作品賞
- 2015 アジア・ソサエティ賞
- 2016 アメリカ宗教学会賞

2017 カラチビエンナーレにて Shahneela and Farhan Faruqui Popular Choice Art Prize 賞

主な作品

新細密画、絵画等

- *The Scroll*, 1989-90.
- *Uprooted Order Series 3*, ヒューストン美術館, 米国, 1995.
- *Ready to Leave?*, ホイットニー美術館, 米国, 1997.
- *G-endangered*, グッゲンハイム美術館, 米国, 1997.

アニメーション

- *SpiNN*, 福岡アジア美術館, 日本, 2003.
- *The Last Post*, 上海外灘美術館, 中国, 2010.
- *Parallax*, キラン・ナダール美術館, インド, シャルジャ・アート・ファンデーション, アラブ首長国連邦, 2013.
- *Disruption as Rapture*, フィラデルフィア美術館, 米国, 2016.

その他

- *Ecstasy as Sublime, Heart as Vector*, プリンストン大学, 米国, 2016.
- *The Perennial Gaze*, ミドルベリー・カレッジ, 米国, 2018.
- *Arose*, ミネアポリス美術館, 米国, 2020.
- *Promiscuous Intimacies*, ジーザス・カレッジ, 英国, 2020.

主な展覧会

- 「ホイットニー・ビエンナーレ」ホイットニー美術館, ニューヨーク, 1997.
- *Directions: Shahzia Sikander*, ハーシュホーン博物館と彫刻庭園, ワシントンD.C., 1999.
- *Acts of Balance*, フィリップモリス・ホイットニー美術館, ニューヨーク, 2000.
- *Always a little further: 51st International Art Exhibition*, ヴェネツィア・ビエンナーレ, 2005.
- 「シャジア・シカンダー」シドニー現代美術館, アイルランド現代美術館, ダブリン, 2007.
- 第4回福岡アジア美術トリエンナーレ, 福岡アジア美術館, 2009.
- 「トランスフォーメーション」東京都現代美術館, 2010.
- *Future Pass: From Asia to the World*, 第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展, ヴェネツィア, 2011.
- 「第13回イスタンブール・ビエンナーレ」イスタンブール, 2013.
- *PARALLAX*, ニコライ現代美術センター, コペンハーゲン, ビルド・ムセアット, スウェーデン, ビルバオ・グッゲンハイム美術館, カールトン・カレッジ, ミネソタ州, ホノルル美術館, 2014-17.
- *All the World's Futures*, 第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展, ヴェネツィア, 2015.
- *Ecstasy as Sublime, Heart as Vector*, イタリア国立21世紀美術館, ローマ, 2016-17.
- 「アジア美術、100年の旅」福岡アジア美術館, 2019.
- 「シャジア・シカンダー: Extraordinary Realities」モーガン ライブラリー&ミュージアム, ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン美術館, ニューヨーク, ヒューストン美術館, テキサス, 2021-22.

主な著作

- *Extraordinary Realities* (共著) シカゴ大学出版, 2021.
- *Roots and Wings: How Shahzia Sikander Became an Artist* (共著) ニューヨーク現代美術館, 2021.